子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2010年1月　NO.153

「歩　月」　和泉蒼牛

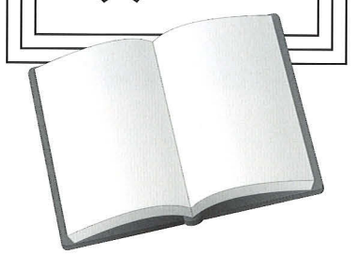
〈もくじ〉

図書館は毎年が「読書年」 …… 丸地真人　2
新たな100年へ 南加高知県人会創立百周年記念式典を省みて …… 飯沼星光　3
「日本一」をもっと大切に！ どこかおかしい土佐の“売り方”(前編) …… 中内光昭　4～5
木造倉庫の美術館だが… 熱い思いと願い秘めて …… 武内光仁　6～7
出会いの海へ・一冊の本をめぐって④ …… 前田由紀枝　8～9
言葉の現場から19　「木琴」のなぞを読み解く(2) …… 広井　護　10～11
高知のギャラリー⑮　スタジオ可葉 …… 北古味可葉　12
高知市文化振興事業団 11月～12月の事業から …… 13
風俗歳時記・風伯 …… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

図書館は毎年が「読書年」

丸地真人



今年は、「国民読書年」です。これについては、平成二十年六月六日に第一六九回国会で次のように決議されています。

――文字・活字によって、人類はその英知を後世に伝えてきた。この豊穣で深遠な知的遺産を受け継ぎ、更に発展させ、心豊かな社会の実現につなげていくことは、今の世に生きる我々が負うべき重大な責務である。

しかし、近年我が国でも「活字離れ」と言われて久しく、年齢層を問わず、読書への興味が薄れていると言わざるを得ない。これが言語力、読解力の衰退や精神文明の変質の大きな要因の一つとなりつつあることは否定できない。――

平成十一年に「子ども読書年に関する決議」を両院で採択、同じく十三年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」、十七年には「文字・活字文化振興法」が制定され、この決議へとつながっています。

言語は、人間の情報伝達手段であり、文字は、言語の貯蔵手段です。そうすると、本は「文字の缶詰」ということになるでしょうか。それを収集・保存し、分類や索引により組織化して、利用上の価値を高めたものが図書館です。文字（情報）、読書、図書館の三者は切っても切れない関係にありますから、「情報化」や「読書活動推進」は本来、図書館の整備・充実を伴っているはずなのです。

高知県立図書館では、「国民読書年」の趣旨を踏まえ、ＮＰＯ法人「高知こどもの図書館」とともに、今年の『高知市民の大学』に、「読書と図書館のススメ」というタイトルで企画を提供することといたしました。内容は、図書館そのもののしくみ・成り立ち、図書館を上手に使う方法、郷土資料とアーカイブの課題、出版状況、子どもの本と読書に関することなど全十五回（四月九日から七月十六日まで毎週金曜）です。

一方、県立図書館独自の企画としては、毎年夏休みに図書館での本の探し方、調べ方をゲームを通じて学べる「図書館アドベンチャー」というものを行っていますが、これを「国民読書年」の趣旨に合わせたものにして実施する予定です。ブックリストなども多く作っていきたいと考えています。ただし、これらは、以前から行っているものであり、図書館では毎年が、「読書年」です。

読書は、日常的に身近なところで行われるものです。一日一日の地道な積み重ねがやがて一年となり、その後も年月を積み重ねていくように、図書館は、日々の蓄積を大切にしていきたいと思っています。

（まるちまさひと／高知県立図書館館長）

新たな100年へ

南カリフォルニア高知県人会

創立百周年記念式典を省みて

飯沼星光　1926年ロサンゼルス生まれの日系二世。工学博士。
南加高知県人会創立100周年記念式典実行委員長を務めた。
ロサンゼルス龍馬会会長でもある。ロサンゼルス郊外在住。

南カリフォルニア高知県人会は昨年十一月一日、創立百周年記念式典を盛大に催すことができた。百年祭実行委員長として準備に費やした四年間を振り返ると感慨無量である。

パイオニア・一世の故郷高知より、またはるばるブラジルより高知県人会の一行、在ロサンゼルス日系諸団体の代表者、県人会のメンバーとその家族ら計三百三十余名の参加を得ての祝賀会は、他のどの県人会でも見られなかった盛況さであり、土佐人の同郷人を愛する心情の表れであった。

小生がこの記念行事の実行委員長という大役を引き受けたのは、同じ移民の子として先輩達の努力と功績に報うことにほかならない。戦時中一時休止したといえ、小生の親を含め多くの先輩達により、県人会が創立され今日まで継続し百年祭を迎えることができたのである。

小生自身はアメリカに生まれ朝鮮動乱には米国軍の一員として従軍、除隊後アメリカの大学を経て軍事産業に携わってきたアメリカ人ではあるが、誰よりも土佐を愛し、土佐の料理を愛で、国籍に関係なく生粋の高知県人だと自負している。祖先は代々山内家に仕え、墓も高知にある。少年時代を高知で過ごし、旧城東中学（現追手前高）で学び多くの友人と現在も交際が続いている。高知に帰ったときは何のためらいもなく土佐弁が、それも今は使われていない古い土佐弁が出るのも根っからの土佐人だからであろう。

アメリカにおける高知県人の歴史は、一九〇九年の県人会創立の六十六年前、十五才の中浜万次郎が捕鯨船に救助された後、アメリカ本土に足跡を残した一八四三年に始まったと言っても過言ではない。

言語、習慣の違いの中で、県人会の多くは配偶者を得て家庭を営み、二世も成長して、アメリカ社会で堅実な発展を遂げていった。しかし、第二次世界大戦開戦によって米国西海岸における排日の高まりは在米日系人史上最悪の事態に進んでいった。

一九四二年、西海岸の日系人約十一万人は強制立ち退きを迫られ、戦争終結まで収容所に抑留され苦難の生活を強いられたのである。一方多くの二世は、高知県出身の親を持つ者を含め、祖国米国に忠誠を尽くすべく志願し、二世兵士で編成された４４２部隊がヨーロッパで、また情報部隊（ＭＩＳ）が太平洋方面で赫々たる偉勲を立てた。この事が日系人に対する感情を一変させ、戦後収容所から帰還した日系人の境遇をどれだけ好転させたか計り知れない。式典では彼ら二世兵士達に感謝し、高知県からも日系社会に貢献した功績を称え記念品が贈られた。

一時中断された高知県人会も一九四九年再発足し、戦後移住した新一世や帰米二世が高齢になった一世を支えてきた。創立七十五周年、八十五周年、九十周年と、県から大勢の来賓を迎え祝うことができ、会員数も二百七十余名までになった。だが、どの日系人組織にも見られるように、パイオニア・一世が減少し二世、三世の時代に移り、二十一世紀になると一世の姿は無く、二世や戦後移住した新一世達も高齢になり県人会の運営に危惧を感ずるようになった。

百年祭を企画するに当たっても、果たして参加者を集めることができるのかと危惧を抱いたのは実行委員長を仰せつかった小生だけではなかっただろう。しかし、開催に向け尽力された実行委員、高知県庁の担当者、高知新聞社の方々のご協力により想像もしなかった多数の参加を得た。記念式典の開催、またまもなく発行される記念誌の編集に際し、多くの高知県はじめ日本の皆様、諸団体よりご援助、ご協力をいただいたことに心より感謝申し上げます。

参加者の中に多くの三世、四世の顔が見られたことに、心強く感じさせられた百年祭であった。彼らがパイオニア精神を継承し、歴史ある南カリフォルニア高知県人会の新たな百年に向かって歩みだしてくれるであろう。

（いいぬませいこう）

「日本一」をもっと大切に！

どこかおかしい土佐の〝売り方〟（前編）

中内光昭

年輩の方なら覚えておられるに違いない。高松から百余のトンネルをくぐり抜けてきた列車が、土佐山田に近づき、長い坂を下りはじめた途端に窓から飛び込んできた目を射るような明るい陽光のことを。県外から来た人は「まぶしい」と言うより、「きつい」とか「痛い」とか言う。この降り注ぐエネルギーは、いわば天から県への贈り物であり、県の未来を照らす光でもある。高知県は潜在的な資源大国と言える。

この豊かな光エネルギーを農林業以外に利用できないか、と考える人は多いと思う。特に、最近話題の太陽光発電への利用は誰でも思いつくだろう。

筆者は、かねがね、高知での太陽光発電の優位性と普及の必要性を強調してきたが（高知新聞「地域特性を生かして」一九九四年三月・同紙「土佐の未来をバラ色に」二〇〇六年七月）、優位性を裏付ける具体的なデータを持ち合わせず、はがゆい思いをしてきた。

太陽光発電の効率を、地域間で比較するのは容易ではない。効率は、日射の強さはもちろん、日照時間、気温、空気の透明度など、さまざまな条件によって左右される。さらに、このような自然条件は時時刻刻変動する。したがって、その土地の発電効率をこれら諸条件の統計的数値から計算で割り出すことは、極めて困難である。一番確実なのは、各地に実際に発電パネルを設置し、それらの年間の発電量を調べればよいのだが、これは素人には到底手に負えない大事業である。ところが、以下述べるように、このような全国的な調査が既になされていたのである。

不動のランキング

筆者は、昨年、たまたまアイコクアルファ社（愛知県）のホームページで、探し求めていた数字と遭遇することができた（表）。なんと、高知県は「県別の発電効率」が全国一位とある。同社によると、データは新エネルギー財団により測定されたものとのことである。

この表の示す意味は重い。第一に、全国に同じパネルを設置した場合、一番たくさん発電するのが高知県のパネルだということである。第二に、九年間の平均であり、かなり安定した数字であるということである。つまり、余程の気候変動でもない限り、このランキングは不動である。学力やスポーツなど、人間世界のランキングは、年々変動するが（だから、面白い）、自然が主役のランキングは、まず当分変わる心配はない。大切にしたいものである。

今、世界で県外で

昨今、地球温暖化問題と世界同時不況との関連もあり、自然エネルギーが国の内外で関心を集めている。この分野で世界をリードしようとするスペインのような国もあれば、社運を効率高い発電パネルの開発に賭ける国内の会社など、今、太陽光発電を巡るビジネスの戦いは熱い。

日本政府も昨年来、太陽光発電の産業を支援したり、家庭の太陽光発電の補助を拡大するなど、新エネルギー利用へ大きく舵を切っている。昨年十一月からは、一般家庭で生まれた太陽光発電の余剰電力を、電力会社がキロ当たり四十八円（従来は二十四円）で購入するように義務づけた。さらに、「余剰」だけでなく、すべてのクリーン電力を買い取らせる案も浮上している。

各地での動きも急である。群馬県太田市の新興住宅地では、約八割の住宅（五五三戸）にパネルを設置して効果を検証中であるし、山梨県は県を挙げて太陽光発電を支援し、多くの企業の試験地になっている。さらに、昨年十一月には県の土地に、東京電力がメガソーラー（大規模太陽光発電所）を建設する協定を締結している。ここでの発電量は年間千二百万キロワットで、一般家庭三千四百世帯の年間の使用電力量に相当するとのことである。

「太陽のくに」土佐

では、本県での太陽光発電への取り組みはどうであろうか？　県下では、最近、県や民間団体が、産業や観光に関する県の将来像を描いているが、龍馬など過去の偉人に頼ろうという後ろ向きの姿勢が目立つ一方、太陽光発電など未来志向の元気な気迫が感じられない。

筆者が別掲の表を紹介するのは今回が初めてではない。昨年四月九日高知新聞学芸欄で、「日本一」を県の浮上に使うよう訴えたつもりであった。驚いたことに、反響はまことに小さかった。一つの企業と二人の個人から問い合わせがあっただけで、その後、県政の動きに何の変化も見られない。マスコミの反応もどちらかと言えば鈍い。

下位のランキングに慣れた本県にとって、発電効率「日本一」は貴重な財産である。この「金メダル」には大きく二つの利用方法がある。一つは太陽光発電企業を誘致したり、公共施設や一般家庭へのパネル設置を促進して、自然エネルギー先進県になることである。もう一つは、土佐を科学的な数字に裏付けられた「太陽のくに」として大いにキャンペーンし、県のイメージアップにつなげることである。

社会でイメージの果たす役割は大きい。一度定着すれば、そのイメージは長く一人歩きをする。たとえばナポリ。ここは「君よ知るや南の国」と唱われ、「明るい南の町」として世界に知られている。筆者はこの町で仕事をしたことがあり、街も人間も大好きであるが、現在のナポリは「太陽の街」とは少し違う。にもかかわらず、ナポリには依然として「南」のイメージがつきまとう。

関係業者や観光客、さらに、「ついの住処」の適地を探す人々に、高知を「太陽のくに」として売り出すのは今である。一度「太陽のくに」として認知されればしめたものである。そのイメージは今後百年、事実に裏付けられて定着することだろう。

「追い風」はいつまでも吹いてはいない。明日では遅すぎる。

（なかうちみつあき／高知大学元学長）

太陽光発電効率ランキング

都道府県別KW当りの
年間発生電力量

1位	高知県	1115	KWh
2位	静岡県	1094	KWh
3位	山梨県	1092	KWh
4位	宮崎県	1068	KWh
5位	群馬県	1060	KWh
6位	徳島県	1046	KWh
7位	長野県	1039	KWh
7位	愛知県	1039	KWh
	全国平均	979	KWh

新エネルギー財団
1995年4月-2004年3月の平均

木造倉庫の美術館だが…熱い思いと願い秘めて

武内光仁

南国市の白木谷。どこにでもありそうな山里に、今、ぽつぽつと人びとが集まってくる一角があります。昨春ここに誕生した風変わりな「美術館」を目当てに、物珍しさも手伝ってか、美術好きの人々が県内外から集まるようになったのです。

これは木造倉庫を改修した手づくりの美術館であり、七年越しの私の「念願」だったものです。まだまだ未完成の美術館を眺めながら、「ここには父母から受けた愛情が濃密に塗り込められているのではないか」とふと思ったりもします…。

一九四七年五月二十四日、父・武内繁寅、母・花子の三男としてこの白木谷に生まれた私は、父とは九歳で、母とは十六歳の時と本当に早い別れを味わってきました。にもかかわらず、今、振り返ってみると、この二人から受けた一つひとつの教えが実は大変に意義深く大切なものであり、そんな教えや周囲の人びとの支援、協力のおかげでこの〝器〟ができたのではないかと今更ながら思うのです。

さて、この美術館誕生の「きっかけ」は一九九八年に白木谷で開いた「アウトドア・ワンマンショー」（野外個展）にさかのぼります。

山より海に流れる岩石は揉まれ、摩耗し、強固な部分のみ残ります。最後は一粒の砂となり、そして海水に溶け、ナトリウム、カリウム、マグネシウム、カルシウム等のプラスイオンとなる―という「玉石」。その間何千年という時が経過するのですが、その時の流れを象徴的に、芸術的に「逆流」させて提示する野外彫刻展を開こうと考えたのです。

二百十五トンの玉石を須崎市浦ノ内の採石場から片道一時間半をかけて白木谷に運びました。一個一個の玉石の面を見つめながら雨の日も風の日も積み重ね、両手首の腱鞘炎との戦いの日々が続きました。玉石百三十トンを使用した「風道―巡礼の風」、六十二トンの「紳士たちの昼食会」を制作し終えたとき、快い疲労の中で私の心の中にめらめらと燃える「火」のようなものを感じました。

現在、この玉石作品は雑草に覆われて美術館の傍らに立っています。雑草を取り除くのは大変ですが玉石の姿は以前と少しも変わりません。しかし、雨が降ると少しずつ濡れ、その表情は微妙に変化してしっとりと落ち着いた「和み」の空間を与えてくれます。師・浜口富治先生はそんな玉石の作品を見て大層喜んで、

「白木谷　蝉哭く里に玉石を　海より運ぶ　男ぞあはれ」

「父母（ちちはは）に　玉石積めば　蝉時雨」

「人生を　五十章に　夏鴫（なつかもめ）」

と詠んでくださったのです。

美術評論家、ヨシダ・ヨシエ、中野中先生からも大変な評価をいただき、中野先生は一九九八年の「月刊ギャラリー」（十月号）にしっかりと記録に残してくださいました。

この野外個展終了後、浜口先生と高知市城北町にあった寿司屋で食事をしながら、中央画壇の動きや私の制作の件などさまざまなお話をすることができました。席上、「武内よ、お互いに今やっている仕事を評価してもらえるまでには五十年はかかる。五十年先になっても評価してもらえなかったら、その時はおしまいヨ」と先生は珍しく冗舌でした。

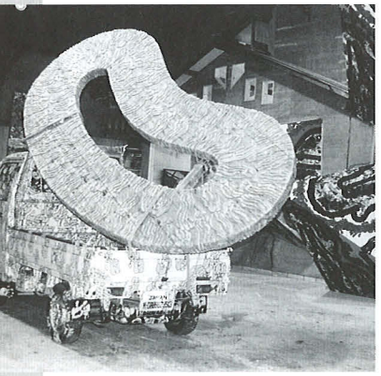
私たちの芸術運動の軌跡を何とか残せぬものかと思った私がふいに、「何十年かかるかわかりませんが、白木谷に美術館をつくります」と話すと、先生は「そりゃあうれしいが、なかなか大変ぞ。ちょっとやそっとの事じゃないぞ」。私は「親にもらった土地・建物ではないので、自由にやれます。何とか頑張って設立したいです」とお話しし、これが美術館の第一歩となりました。

その後、着工までには時間がかかりましたが、二〇〇二年からアトリエ、倉庫の改装工事に着手し、毎日深夜まで作業が続きました。長男夫婦、孫、妻の弟や姪が里帰りしてきても結局、作業の手伝いです。三十ミリの断熱材を積み重ねた上で寝させたりもしましたが、ありがたいことに誰一人文句も言わず耐えてくれました。美術館として機能するには、アトリエ、倉庫の改築だけでは狭く増築しなければならないのですが、北京オリンピック前と重なり建築資材はあっという間に高騰し、建物が完成できるか…と不安の日々が続きます。何十回となく挫折しかかったのですが、知人らにも励まされ心身ともに苦しい作業を続けました。

特につらい作業は天井、壁面に断熱材を張る作業でした。脚立にあがり高い天井の寸法を取り、妻がノートに控える。それを読み上げてもらい、断熱材を切って裏に接着剤を塗り、天井の垂木の間にはめ込む…そのほか、今は思い出したくもない大変な作業が延々三年七か月も続きました。

着工から七年、やっと二〇〇九年五月一日、金曜日仏滅の日に木造倉庫の展示場「白木谷国際現代美術館」を開館しましたが、その十日ほど後の五月十三日が浜口富治先生との悲しいお別れとなりました。奥様より寄贈していただいた先生の作品「生きた日のモニュメント」（油彩、二〇〇号）二点は、「武内、骨になるまで毎日しっかり頑張れ」という先生の熱いメッセージではないか…そう思って大切に展示させていただいています。

今、第三回白木谷国際現代美術館企画「今だからこそ・今・武内光仁の世界」を開催しています。今回展示した「八白土星―さまざまな出会い、そして別れ、時が刻まれるままに」は、一九九八年制作の立体作品です。宇宙のエネルギーを根からしっかり吸収するため、根付きの木四本を逆さに立て、その内の三本の木には〈時〉を刻む時計をはめ込んだ作品です。東京・新宿のアンファンで開いた個展の出品作で、美術評論家、中野中先生が「展評」〇〇二号で「前衛土佐派は死なず」と評価してくださったもので高知は初公開。ほかに四十点の自作を展示すると同時に、稲毛嘉子一点、島村義一二点、高崎元尚二点、竹村晴夫二点、浜口富治三点、吉村善博二点、渡辺一八大六点…と収蔵品中心に各先生の名作も展示しています。



苦しみながらやっと開館した「白木谷国際現代美術館」は、よりよい美術館を目指して未だに建設中なのですが、寒桜、梅、桃の花咲く頃、二月一日には屋外展示場も開館します。入り口から屋外展示場まで車椅子で通行できますし、休憩所も設置、様々な花の香りや新鮮なオゾンを体いっぱいに吸収できます…。

美術館建設という「壮大」な夢も一段落。「これでやっと昔のように深夜まで自分の制作に没頭できる」という不思議な充足感が心に満ちている今、もうすぐ始まる中国・上海でのグループ展に向けた制作に励まなければなりません。そして、これまでご高覧いただいた数多いお客様からのアドバイスや励ましのお言葉を大切にしながら、ご協力をいただいた作家の先生方への感謝を忘れず今後も見応えのある企画展を、と念願しています。

白木谷国際現代美術館ホームページ
http://shirakidani.jpn.cx

（たけうちみつひと／白木谷国際現代美術館代表）

出会いの海へ・一冊の本をめぐって④

龍馬、駆け出す！

前田由紀枝

十月初め、尋ねたいことがあると言って事務室に入って来られた人がいた。

「俳優さんが質問があると言って来ています」と言って職員が案内してきたのであるが、記念館には有名無名いろんな俳優さんが来られる。だから私はあまり気にも留めていなかった。特にそのときは時間に追われた仕事をしていたので、顔も見ずに「そこにかけてお待ちください」と隣の事務椅子を勧めたきりであった。

少しして顔を上げたとき、見覚えのある顔だなと思った。「お名前は？」と聞くと「内野です」と言う。気負いのない返事に、旧知の人が訪ねてきたような気持ちになったのは不思議である。

俳優さんは内野聖陽さん。大河ドラマ『風林火山』で主役・山本勘助を演じるなど、多くの人の心をつかんでいる人だ。リュック一つでふらりという感じで来られた内野さんは、春風のような人だった。

内野さんの質問は『和英通韻伊呂波便覧』という海援隊出版の英語テキスト本から始まったが、あっという間に一時間経っていた。気持ちを表しやすい土佐弁が好きだ。高知に来て友だちになった人と飲みながら土佐弁を学んだ。近々『JIN-仁-』というテレビドラマで龍馬を演じる。数日休みができたので龍馬の役作りをするためにまた高知に来た。その土地でないと分からない空気、それを感じるために…。

自分のことを語る内野さんとの会話は楽しかった。この人は十分龍馬をつかんでいる。そう感じながら、私は内野さんと龍馬のことを語り合った。

間もなくドラマは始まり、私は驚いた。そこに〝龍馬〟がいたからである。内野さんは、肩先や後ろ姿まですべてが龍馬だった。演じているという感じがまったくない。龍馬がしゃべり動き笑っている。

そんな画面に魅せられてしまった私は、近年珍しく日曜の夜はテレビの前にいて、主役の南方仁先生や龍馬の働きをわくわくしながら観ているところ。年内の楽しみである。

さて、並行して大河ドラマ『天地人』が終わった。『龍馬伝』の予告が出た。いよいよである。主役は龍馬。龍馬が駆け出す！

昨年六月に『龍馬伝』の制作発表がされたときのことを思い出す。いろいろな人の顔が浮かんだ。真っ先に浮かんだのは『ほいたら待ちゆうき』に掲載された人たちである。取材をさせていただいた人はもちろん、全国津々浦々にいる多くの顔。福山雅治さんの龍馬に歓声を上げている顔が浮かぶ。

その土地に行かないと分からない空気や景色、風の匂い、生活。それを知るために、昨年『ほいたら待ちゆうき』（拝啓竜馬殿）の取材行脚をした。足かけ三か月、福岡から東京、新潟まで十数名の方に会った。記念館にメッセージを残した一万二千人の中で言えば本当に一握りの人たちであるけれど、それでも多くの景色に出会った。

奈良の藤原さんは、海外で働くという夢を叶えた。「女だってやれる」と龍馬に誓い、中国語をマスターしてたった一人で上海に渡った。

六十三歳で八千万円の借金をして理容店をリニューアルオープンさせた東京の山田さん。地域の人が集まる場所にしたいと、店にはコーヒーやお茶を用意した小さなサロンがあった。

神戸の山口さんは三人の男の子のお母さん。阪神大震災で大きな被害を受けた長田区に踏ん張り、震災の教訓を子育てにつないでいた。

三重の安田さんは交通事故死した夫のことを思い、小さな子どもを連れてお遍路に出た。苦しみの果てに生きる希望を見出したという。

進学や就職につまずいた広島の森本さんは、日本を変えることはできなかったけれど、地元で再就職しかわいい奥さんと幸せな結婚をしていた。

大阪の川添さんも奥さんと猫たちとの生活に満足している。選挙に行っても日本は変わらないと言っていたが、取材後来たメールには「次の選挙には行く」とあった。

女の人が元気だなと思った。男たちはやさしかった。

新潟の地震で被災した若林さんは、金婚式に子どもたちが上げてくれた花火の話をしてくれた。一月の寒い一日。自家製の米でつくったおにぎりやゼンマイの煮付け、漬物などを用意して待っていてくれた。外にはツララがあったが、温かい気持ちをもらった。有名な長岡の花火。地域の人が寄せる花火への思いを初めて知った。

小学生にも会った。愛知の藤木君兄弟。二人は眠れないまま朝を向かえ、正座して待っていてくれた。それ以上に緊張していたのがお父さん。お母さんはそんな三人を微笑んで見ていた。

勤務医から漢方医になった大阪の峰さんは、長崎出身。信念を貫く人にも、龍馬好きの弟へ寄せる小さな疼きがあった。

京都伏見・寺田屋の隣で割烹を営む辻さんは、熱心な龍馬ファンでないと言いつつ、『竜馬がゆく』を三回読み、新婚旅行は高知から鹿児島へ龍馬コースで辿ったという。伏見はこれからますます龍馬ファンで賑わうのだろうな。

中学三年、受験生の河上さんは中学教師のご両親と一緒だった。うつむき加減だったのは進路を前にした不安と期待が揺れていたから。福井駅前は冷たい雨が降っていたね。

待ち合わせ場所に駆け込んできた林田母子のうれしそうな笑顔。この二人が最初の取材だった。正月気分の抜け切らない福岡博多の朝、空気は輝いていた。

懐かしい顔、それぞれの風景が浮かぶ。

初めて会うのに初めてでない気持ちだったのは、みんな龍馬が紹介してくれた人たちだったから。駆け出した龍馬は、これからも多くの出会いをつないでいくことだろう。

（二〇〇九年十二月）

（まえだゆきえ／高知県立坂本龍馬記念館）

言葉の現場から 19

「木琴」のなぞを読み解く(2)

広井　護

木琴

金井　直

妹よ
今夜は雨が降っていて
お前の木琴がきけない

お前はいつも大事に木琴をかかえて
学校へ通っていたね
暗い家の中でもお前は
木琴といっしょに歌っていたね
そして　よくこう言ったね
「早く街に赤や青や黄色の電灯がつくといいな」

あんなにいやがっていた戦争が
お前と木琴を焼いてしまった

妹よ
お前が地上で木琴を鳴らさなくなり
星の中で鳴らし始めてから間もなく
街は明るくなったのだよ

私のほかに誰も知らないけれど
妹よ
今夜は雨が降っていて
お前の木琴がきけない

「木琴」は、やさしい言葉で書かれた詩である。だが、奥の深い作品だ。言葉の裏に、深い物語を隠している。

この詩を読み解く過程で、「プラマイ読み」と名付ける読みの方法を発見した。

たとえば、タイトルの「木琴」のイメージを「鉄琴」のイメージと読み比べると、二通りの読みが可能になる。

肯定的に読めば、「木琴」は材質や音の響きから、「やわらかい」「素朴」「まろやか」などと読める。否定的に読めば、「もろい」「こわれやすい」とも読める。

それは、この詩のヒロインである「妹」のイメージと重なる。兄にとって「妹」は、「やわらかく素朴」で、しかし「もろくこわれやすい」存在であった。木琴のように。

さらに、「妹」のイメージは、この詩の主題である「平和」のイメージと重なる。「平和」は、「やわらかく素朴」で、しかも「もろくこわれやすい」ものである。しかし、だからこそかけがえのない貴重なものだ。大切な妹のように。また妹の愛した木琴のように。

…といった主題が、浮き彫りになってゆく。

作品の言葉を肯定的に読んだときには、否定的に読み返してみる。否定的に読んだときには肯定的に読み返してみる。そして二つの読みを重ね合わせる。こういう読みの方法が作品の深層へ迫る有効な手段となることがある。

この方法を、中学生には「プラマイ読み」と名付けて教えている。「プラス読み・マイナス読み」の略である。

この方法を駆使して、「木琴」の「第四連」から、この作品の深層のテーマを読み解いてみたい。

「妹よ　お前が地上で…」からはじまる「木琴」の第四連には、独特の余韻がただよっている。悲しく、それでいて温かい不思議な余情である。この感じを、授業の中でうまく説明できずに苦しんだ時期がある。

あるとき、第四連の「間もなく」という言葉に目が止まった。そして、この平凡な言葉こそ、この詩の深層の物語を読み解く「鍵」だと気がついた。

「間もなく」からは、次のことが読みとれる。

「お前が地上で木琴を鳴らさなくなって」から「間もなく」街は明るくなったというのだから、「お前が死んだすぐ後で戦争は終わった」ということになる。逆に言えば、あの日の空襲さえまぬがれていれば、戦争は終わり、妹は今も生きているはずなのである。その救いようのないくやしさが、この言葉には込められている。

第四連にただよっている不思議な余韻の意味はそれだと私は考えた。この読みを「読みA」としよう。

ところが、ある時期から次のことが、気にかかるようになった。

この詩の中で、一番多く使われている言葉は、「妹よ」「お前」という「呼びかけ」の言葉である。「いたね」「言ったね」「たのだよ」という文末表現からも、この詩全体が、妹に向かって語りかけている詩であることがわかる。話者は、読者にではなく、妹に向かって語りかけている。この詩全体が、妹に向けて書かれた手紙のようなものなのである。

これほど妹を愛している兄が、その手紙の中で、こんなことを言おうとするだろうか。

「お前の望みどおり街は明るくなった。だがそれは、むなしい明るさ、むなしい平和だ。もうすこし早く戦争が終わっていれば、お前は死なずにすんだのに。…」

――こういう兄の思いは、もし妹に伝わったとしたら、妹を悲しませるだけだろう。

妹に向かって、あえて「間もなく」という言葉を使ったからには、そこには、妹に幸せを感じさせるような、何か明るく肯定的な意味が込められているのではないか。

そう考えるうちに、次の読みに気がついた。「間もなく」には、「読みA」とはまったく異なる気持ちが込められているのではないか。

お前が星の中でも、平和を願って、木琴を鳴らすようになったから、その願いが天に届いたかのように、「間もなく」街は明るくなったのだよ、という思いである。別の言い方をするなら、「お前の貴い命と引き換えに訪れた平和なのだよ。」というメッセージである。

この思いこそ、妹に向かって語りかけるにふさわしい内容ではないだろうか。この読みを「読みB」としよう。

では、「読みA」は誤りだろうか。熟考するうち、そうではないという結論に達した。「読みA」と「読みB」は同時に成立し、それによってこの詩の中に、奥深いドラマを生み出していることに気がついたのである。

妹が死に、戦争が終わった直後には、兄は運命をのろい、妹のいない平和を憎みさえしたのである。「もうすこし早く戦争が終わっていれば、お前は死なずにすんだのに。…」この思いが兄を苦しめた。街の明かりを見るたびに、「早く街に赤や青や黄色の電灯がつくといいな」という妹の言葉を思いだし、胸をかきむしられる思いだった。

だがあるときから、兄はその絶望的な思いを乗り越えはじめた。強い愛がそれを可能にした。

「妹は死んだ。その肉体は、木琴といっしょに灰になり、地上から消えた。でも、その尊い犠牲の上に、今の平和が訪れたのではないだろうか。妹の死は、無意味な死ではなかったのではないか。いや、無意味な死にしてはならない。この平和を大切にして生きよう。それが妹の願いに応えることではないだろうか。妹は、今も星の中で木琴を鳴らしている。その音色は、平和への永遠の願いを意味しているのだから。…」

そう思うことによって兄は、憎しみと絶望の淵からはい上がっていった。

この「内的な乗り越え」が、「木琴」の深層のテーマではないだろうか。

兄の中で、妹への愛は、個人的な愛を超え、戦争への憎しみさえも超え、普遍的な「平和への愛」へと高まろうとしているのである。

妹を愛し続けることは平和をいとおしむことだと兄は気がつき始めたのだ。だから兄は、本来なら否定的な意味を持つはずの「間もなく」という言葉を、逆に妹へのはなむけの言葉として肯定的に使うことができたのである。

しかし、ここで注意しなければならない。それは、「お前が地上で木琴を鳴らさなくなり　星の中で鳴らし始めてから間もなく」という表現の持つ曖昧さである。

「お前が星の中で鳴らし始めたから、間もなく」と言い切ってはいない。ここには、否定的な読み―「読みA」の可能性が色濃く残されている。

例えば、妹の死と平和の到来の重なりは、単なる偶然の一致かもしれないのである。だとすれば、妹の死には何の意味もなかったのかもしれない。――そういう否定的思いへと逆行する余地が残されている。

だが、そこにこそ、第四連にただよう不思議な余韻の秘密がある。

兄は否定的な感情を、まだいっぱいひきずりながらも、それを乗り越えようとして、祈るように、妹に向かって語りかけている。そこにこの詩の胸を打つ響きがあるのではないだろうか。

（ひろいまもる／土佐中学校教諭）

高知のギャラリー15

スタジオ可葉

北古味可葉

スタジオ可葉は佐川町上町の「酒蔵の道」と呼ばれる、司牡丹の本社、工場が軒を連ねる一角にあります。明治維新ごろに建てられたという白壁蔵造りの商家だった空き家をお借りし、七年目を迎えました。書の創作は二階の大部屋をもっぱら使いますので、かつては呉服店舗であった一階の土間、上がりかまちのある空間、奥の十二畳の座敷を地元の方たちが気軽にアートに接し、楽しめるギャラリーとしました。

かつては高知県西部を商圏に、手広く呉服を商っていたというこの家の梁は、どっしりとした厚みを持ち、また、大切な反物を保管するための蔵だったのでしょう、重厚な内蔵が土間を隔ててあります。家の内部もそのままで、白い和紙を張った格子戸の引き戸を開けると「いらっしゃいませ」と丁寧な挨拶が聞こえるような、往時の雰囲気があります。

スタジオ可葉のオープンでは、私の作品展「蔵くらっと展」を行いました。ギャラリーでは私の作品を常設展示するほか、単なる展示空間ではなく、アーティストの交流の場とする、そのような機能を大切にしています。そういった交流を通じ、書と陶芸、洋画、造形など異なる分野とのコラボレーションを行ってきました。また、アップライトのピアノを置き、これまで、ジャズピアノ、モンゴルの伝統音楽、津軽三味線、フォークローレなど、一年に一、二回の割合で小規模なコンサートを開催しています。

佐川町上町は、歴史的に酒造りを中心に発展し、江戸時代より有力な商家や造り酒屋が軒を連ねていた区域です。スタジオ可葉の東隣には、かつては黒金屋の屋号を持つ造り酒屋の屋敷があり、国の重要文化財「竹村家住宅」として当時の雰囲気を伝えています。

年末から早春にかけては酒の仕込みが活発に行われ、新酒の香りが漂います。二月には上町のあちこちの家に雛人形が飾られ、春には牧野公園の桜が咲き誇り、夕刻には公園から上町にかけて通りにぼんぼりが灯り、幽玄な雰囲気となります。また、八月には「佐川・酒蔵ロード劇場」と銘打ち、白壁に光の切り絵を映し出し、路上でダンス、ミュージック、映像などのパフォーマンスを行うフェスティバルを開催しています。

「疲弊する地方」と言われ、かつての賑わいを失いつつある地方都市・佐川も、そのひとつではあるのですが、スタジオ可葉のある上町には歴史を感じさせる建物、そして豊かな自然に包まれゆったりと落ち着いた佇まいがあります。スタジオ可葉はここを書の創作の場とし、そして皆さんに気軽にアートを楽しんでいただく場を提供することで、真に豊かな生活とはどのようなものかを提示していきたいと思っています。

最新ニュース…初春より高知ファイティングドッグスの拠点が佐川になります。地方の小さな町、佐川に新たな活力を吹き込む、その原動力として期待されています。

（きたこみかよう／書家）

スタジオ可葉
高岡郡佐川町甲 1300
JR 佐川駅　徒歩５分
電話 0889-22-0623

高知市文化振興事業団

11月～12月の事業から

ワールドミュージックナイト vol.4

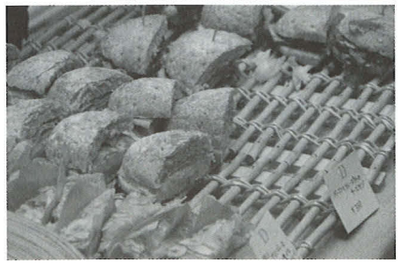
～世界の音楽と料理を楽しむタベ～

12月1日（火）　かるぽーと小ホール

「国際的な音楽交流を中心に高知を楽しくするプロジェクト」との共催でお届けする、世界の音楽と料理を楽しむ人気プログラムの第４弾を開催しました。今回は会場をガレリアから小ホールに移し、照明やスタンディングテーブルなどでライブハウスらしい空間に作りあげました。そして今回のテーマは、「フォーマル」！　お客さんにオシャレをしてもらい、おいしい料理と素敵な音楽で特別な時間を過ごしてもらいます。

演奏はアースデイズ・シンガーズの皆さんの歌でスタートししっとりとしたところで、フラメンコユニット・クアトロアマダスさんの演奏。情熱たっぷりの演奏と踊りに客席は一気に盛り上がります。続いてフラットファイブ・ジャズカルテットさんが登場し、スタンダードジャズを中心とした選曲で、お客さんを盛り上げる心憎いパフォーマンスを披露しました。

最後を飾るのはイーデン・アトウッドさん。ピアノのデイヴィッド・モーゲンロスさんとの、時に熱く、時に情感たっぷりの圧巻のステージです。本編終了後はフラットファイブ・ジャズカルテットさんの共演でクリスマスソングを演奏し、少し早いオシャレなクリスマスプレゼントになりました。



第4回 Concours des Tableaux 企画展 佐竹龍蔵展

12月15日(火)～20日(日)
かるぽーと市民ギャラリー

2009年１月に行われた第４回美術作品コンクールにおいて最優秀賞を受賞した佐竹龍蔵さんの個展を文化振興事業団の企画展として開催しました。

「従来の日本画の画法ではしっくりこなかったので、試行錯誤の末この描き方にたどり着きました」と作家が言う点描に近い画法が生み出す不思議な印象を、審査員の椹木野衣氏は「密やかだが鮮烈で新しい、新世紀のための肖像画の誕生だ」と言います。描かれた人物の瞳の奥に見る人の内面が表現されているかのような錯覚さえ覚えるようです。

急に本格的な冬となった会期中の天候でしたが、訪れた人は作品の織りなす暖かみ溢れる空間と、作家の熱意に心を熱くしたようです。

高知を撮る

第25回写真コンテスト入賞作品

しししこま（3枚組）

（平成20年11月23日　樹原町）

八井田　晋

西区三嶋神社の秋祭りでは、ししこま（子供獅子舞）が氏子の家を回る。幸運の使者と言われ、獅子の口にお金やお菓子などのお布施が入れられる。

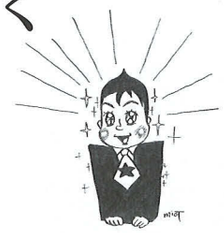
我を磨く

風俗歳時記

就職氷河期と言われる昨今。新年こそは良い年に…と願って「就活」中の方も多いことだろう。就職活動のアドバイスやエントリーシートの添削等を頼まれることがあり、私も近頃の雇用状況の厳しさを肌で感じている一人だ。

就職協定がなくなったので、大学三年生が早くから自己アピールに奔走しているが、それに交じってまだ内定をもらっていない四年生が焦燥感に駆られている。「五十社受けて一つも内定がない」という大学生も珍しくない。いくつかエントリーシートを見ていると、書類審査で不合格になる学生の共通点は「他の人より優位なことはなにか」という点がはっきりしていないこと。学生時代に打ち込んだことはバイトくらい、そこで得られた知識や思いを美しく添削はするものの、内容自体が希薄だと添削にも限界がある。企業はもっと光る個性を求めているのだ。

数百倍の難関を突破して大手マスコミに就職した笑顔の素敵な男性に会った。「君は何でそんな高倍率の中で就職できたの？」と単刀直入に尋ねると、「僕はライフセーバーの世界大会にも出場しているのですが、人の命を守る素晴らしい競技なのに競技自体が人に知られてない。だから多くの人に知ってもらいたい」心でこの業界に入ったんです。その他？　うーん何もないです！」と、目をキラキラさせて答えてくれた。まさに光る個性である。



最近の大学生は、スポーツ系のサークルを敬遠する。上下関係が厳しく休めないから。反対に、規定のゆるい同好会に籍を置いてバイトの予定をびっしり。だから人間関係がうまく築けず、気に入らなければすぐにやめる。スポ根が全てとは言わないが、プレッシャーのない生活は人を怠惰にする。

新しい年は何かを始めるにはよい区切りであり、きっかけである。私自身も今年こそ目標をもって厳しく自分育てをしてみよう。

（立花香）

出演　河野洋一郎　鴨鈴女　藤田辰也　三浦隆志　前田晃男　重定礼子　木村基秀　福重友　中津美幸　皆川あゆみ　岡ひとみ　鈴村貴彦　倉重みゆき　手嶋綾乃　松浦絵里　藤川央子

作・演出・出演　内藤裕敬

大阪名物“南河内万歳一座”6度目の高知見参！
肉体派演技で観る者すべてを爆笑の渦に巻き込み、
幕が下りるとじーんと心にしみている。笑いたいひと、泣きたいひと、
ただものじゃない彼らの高知公演をぜひご覧あれ！

高知市文化プラザ 小ホール

1月23日(土)18:30開演 ／ 1月24日(日)14:00開演
全席自由　前売り3,000円(当日3,500円)
お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団 088-883-5071

風伯

団塊系草食男子

昨年の新語流行語に「草食男子」が入っていた。『感じない男』（二〇〇五）や『草食系男子の恋愛学』（二〇〇八）の著書がある森岡正博はそれを「異性をがつがつと求める肉食系ではない、異性と肩を並べて優しく草を食べることを願う」のが草食系の男だと定義している。これからいうと実はわたしは草食系に当てはまる。しかも物心ついてからずっとそうであるから筋金入りである。

ところが、この男子には年齢のくくりがあって二、三十代の若い男をいうようで、わたしとは親子ほどの開きがある。だからさしづめ「団塊系草食男子」とでもいおうか。草食系などという言葉がまだ流行っていなかった数十年も前は、何を食べているか分からないということで「仙人」といわれた時期もあった。

考えてみると、草物ばかり食べていると肉を食べたくなるし、肉の入らないすき焼きなど食べる気もしない。それでもやはり「仕分け」れば草食系に入るだろうし、肉食系男子のなかに居るより、女性の周りで紛れている方がずっと落ち着く。それに、女性には普通に話ができるし、ひとの話によれば平然と「歯の浮くような」ことを女性に向かって言うそうである。自然に接すればするほどそうなのだから、「ぼや」いても仕方がない。

とはいえ、「異性をがつがつ求めて」ものにする肉食系を心のどこかで羨ましく思うこともあり、草食系だからといって、けっして「感じない」わけでもない。が、自分の「不感症」に気づかずにいるだけなのかもという恐れは抱いている。なんともハッキリしない草食文になってしまった。

（霖）

第160回 市民映画会

路上のソリスト

THE SOLOIST

奏で続ければ、
いつかきっと誰かに届く。

© 2008 DREAMWORKS LLC and UNIVERSAL STUDIOS

それでも恋するバルセロナ

Vicky Cristina Barcelona

恋で人生は変わる？
“自分”が勝つか“恋”に負けるか
あなたなら――

© 2008 Gravier Productions, Inc. and MediaProduccion, S.L.

と　き：2月10日(水)・11日(木)
ところ：高知市文化プラザかるぽーと大ホール

上映時間（両日とも）	
ソリスト	①11:30 ②15:30 ③19:25
バルセロナ	①13:40 ②17:40

料　金：一般前売り1,300円（当日1,500円）
割引（前売り・当日とも）1,000円
※学生証、長寿手帳、障害者手帳などをご持参の方は割引料金
※前売り券は、かるぽーとほか市内各プレイガイドおよび指定のサニーマートで販売
※お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

「歩　月」

和泉蒼牛

「歩月」とは風雅のために月影を踏んで歩くの意。私は秋葉祭りの地、旧高岡郡仁淀村で育った。

少年時代のおつかいの帰り道だった。皓々と射す月の光に自分の影が見え、その影を踏みながら道を急いだ。不気味で不安だった。とても風雅の心地ではなかった。

この作は他の作品を制作中に、フッとこの事を思いついて書いた最初の一枚である。

（いずみそうぎゅう／書家）

文化高知 No.153 [隔月発行]
2010年(平成22年) 1月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869

第20回 高知出版学術賞 推薦募集

優れた学術研究の振興は、文化や出版の向上のみならず、広く高知県の発展に貢献します。「高知出版学術賞」は、当該年における最も優れた学術出版を顕彰することによって、学術研究の振興を図ることを目的としています。該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

【対象】
次の事項をみたすもの。
1) 高知県内に在住する者の学術的著述、または、県外在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。
2) 2009年(平成21年)1月1日から12月31日まで(奥付の日付による)に発行された単行本。

【推薦】
自薦・他薦を問いません。
必要事項を所定の推薦書に記入し、該当図書2部を添えて審査委員会へ提出して下さい。
(図書は原則として返却しません。)
受付締切 1月31日(日)

【表彰】
3点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金10万円を贈ります。
要綱・推薦書をご希望の方にはお送りします。

【推薦・お問い合わせ】
(財)高知市文化振興事業団 内
高知出版学術賞審査委員会 〒780-8529 高知市九反田2-1
電話 088-883-5071 e-mail kikaku@kfca.jp

第26回 写真コンテスト・高知を撮る 作品募集

第25回「I LOVE 高知部門」準特選
遺跡見学(向山遺跡) 朝日義夫

どなたでも、一人何点でも応募できます。**出品料無料**

過去から現在に至る高知県内の出来事や風景、人々のくらしを記録し、郷土の様々な表情を伝えるとともに、未来の高知のあるべき姿を考えていこうというものです。優れた作品は、入選作品展にてたくさんの方にご覧いただきます。

応募締切
1月31日(日)
発表 3月上旬

テーマ

●記録写真部門
記録性を持った高知県に関する写真
(撮影時期を問わず)

●I LOVE 高知部門
好きな高知の風景・風俗等を表現した写真
(1年以内に撮影)

応募先
○高知市内各カメラ店
○(財)高知市文化振興事業団 企画事業課
(月曜休館)
〒780-8529 高知市九反田2-1
電話 088-883-5071

賞
特選 2点(賞状・賞金3万円)
準特選 10点以内(賞状・賞金1万円)
(各部門とも)

入選作品展
平成22年3月16日(火)~21日(日)
高知市文化プラザ 市民ギャラリー

●カラー・モノクロともにワイド四ツ切サイズ(254mm×365mm)以上
●「記録写真部門」は発泡スチロールパネル貼り
●「I LOVE 高知部門」はパネル貼り不要
●組写真は3枚までで、写真の順番と組写真であることを明記して下さい。
詳しい応募要領は高知市文化振興事業団までお問い合わせ下さい。

第25回「記録写真部門」準特選
JR新駅開業 酒井良昌

http://www.kfca.jp e-mail kikaku@kfca.jp